

「全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画セミナーⅡ」
美術情報・資料の活用
― 展覧会カタログから Web まで ―

Information and Resources Study Group
of the Japanese Council of Art Museums

全国美術館会議の情報・資料研究部会では、昨年度に引き続き、平成 22 年度もセミナーを開催いたします。

昨年度は、「美術情報・資料の活用法―展覧会カタログから Web まで―」のタイトルで、情報を発信する側としての美術館と、情報を利用する側としての美術館という両面をもつ美術館の役割と作業の実際についてプログラムを組みました。内容は広範囲にわたり、かつ深い知識を要する事項が多かったため、受講者も 20 人と制限いたしました。受講者からは大変好評をいただき、また私どもも大いに手ごたえを実感いたしました。

本年度のセミナーを開催するに当たり、さらに多くの方々にこのプログラムを体験していただきたく、基本的には昨年の内容を踏襲いたしました。

ただし、変化の激しい情報の世界を反映し、データなどは最新のものに置き換えました。また、昨年の経験を生かし、一部手直しをしてより多くの方にご参加いただけるようにいたしました。

今回は愛知県美術館を会場にお願いし、共同主催としてご協力をいただきました。愛知県美術館のコレクションや業務の特色を生かしたいいくつかの講座や施設見学など、魅力的なプログラムが加わりました。愛知県美術館には紙面を借りてお礼申し上げます。

会員館の置かれた状況はさまざまで、参加者の興味や美術館における役割も多様だと思いますが、単に情報を扱うためのノウハウを学んでいただくというだけではなく、美術館情報の発信と収集という根本的な問題について、今一度考えていただく機会となることを願っております。

山脇 佐江子
全国美術館会議
情報・資料研究部会長
(姫路市立美術館長)

全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画 セミナー II プログラム

テーマ： 美術情報・資料の活用 ― 展覧会カタログから Web まで
日程・会場： 2010 年 9 月 9 日（木）―10 日（金）愛知芸術文化センター 12F アートスペース E・F
主 催： 全国美術館会議 情報・資料研究部会 / 愛知県美術館
趣 旨： 2009 年 11 月に開催した同テーマの企画セミナーが好評をいただき、このたびその第 2 回として、美術館における情報・資料の活用についてセミナーを開催いたします。変化のスピードが激しい図書館の現況を踏まえた上で、展覧会カタログ、美術館の逐次刊行物から始めて、近年 Web 上などで構築・活用が急速に進んでいる美術情報のデータベースなど電子的リソースについて、二次資料からフルテキストの入手までを紹介し、その効果的な整理・利用法を検討いたします。当研究部会が以前より取り組んでまいりましたテーマの一つである情報技術を活かした作品情報のアクセスと発信の可能性についても、美術館の現場で広く関心と呼び起こしていきたいと考えています。第 2 回となる今回のセミナーでは「あいちトリエンナーレ 2010」（2010.8.21-10.31）を開催中の愛知芸術文化センターでの開催となり、本セミナーの 6 講座に加え、愛知県美術館の先進事例を招待講座として 2 講座にわたりご紹介いただくことになりました。

第 1 日 2010 年 9 月 9 日（木）

12：30	受 付
13：00－13：05（5 分）	挨 拶： 牧野 研一郎（愛知県美術館 館長）
13：05－13：10（5 分）	開会の挨拶：山脇 佐江子 （姫路市立美術館 館長 / 情報・資料研究部会長）
13：10－13：25（15 分）	総 論「美術情報・資料の活用―提供と利用のはざまにおいて」 水谷 長志（東京国立近代美術館）
13：25－14：25（60 分）	第 I 講「展覧会カタログ」 住広 昭子（東京国立博物館）
14：25－14：40（15 分）	休 憩
14：40－15：40（60 分）	第 II 講「美術館の逐次刊行物」 中村 節子（石橋財団ブリヂストン美術館）
15：40－16：30（50 分）	第 III 講「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」 水谷 長志
16：30－17：20（50 分）	施設見学「文化情報センターアートライブラリー （愛知芸術文化センター内）」
17：20－18：00（40 分）	自己紹介＋質疑討論
18：30 ～	懇 親 会

第 2 日 2010 年 9 月 10 日（金）

09：15	受 付
09：40－10：40（60 分）	第 IV 講「電子的リソース（二次資料）」 水谷 長志
10：40－11：40（60 分）	第 V 講「電子的リソース（一次資料）」 川口 雅子（国立西洋美術館）
11：40－13：00（80 分）	昼休み
13：00－14：00（60 分）	第 VI 講「作品情報のアクセスと発信」 室屋 泰三（国立新美術館）
14：00－15：00（60 分）	招待講座 I「木村定三コレクションの寄贈受入れ」 村田 眞宏（愛知県美術館 副館長） 古田 浩俊（愛知県美術館 美術課長）
15：00－15：10（10 分）	休 憩
15：10－16：10（60 分）	招待講座 II「愛知県美術館の作品目録の作成 ―木村定三コレクションを中心に―」 鯨井 秀伸（愛知県美術館 主任学芸員）
16：10－17：00（50 分）	質疑討論
17：00－17：05（5 分）	閉会の挨拶：鴨木 年泰 （財団法人 東京富士美術館 / 情報・資料研究部会幹事）

ごあいさつ		1
	姫路市立美術館 館長 / 情報・資料研究部会 部会長 山脇 佐江子	
総 論	美術情報・資料の活用 ― 提供と利用のはざまにおいて	5
	東京国立近代美術館 情報資料室 室長 水谷 長志	
第 I 講	展覧会カタログ	6
	東京国立博物館 学芸企画部 博物館情報課 情報資料室 専門職員 住広 昭子	
第 II 講	美術館の逐次刊行物	10
	石橋財団ブリヂストン美術館 学芸員 中村 節子	
第 III 講	今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動	14
	水谷 長志	
第 IV 講	電子的リソース（二次資料）	18
	水谷 長志	
第 V 講	電子的リソース（一次資料）	22
	国立西洋美術館 主任研究員（情報資料）/ 情報・資料研究部会 幹事 川口 雅子	
第 VI 講	作品情報のアクセスと発信	26
	国立新美術館 主任研究員（情報） 室屋 泰三	
招待講座 I	木村定三コレクションの寄贈受入れ	30
	愛知県美術館 副館長 愛知県美術館 美術課長 村田 眞宏 古田 浩俊	
招待講座 II	愛知県美術館の作品目録の作成―木村定三コレクションを中心に	31
	愛知県美術館 主任学芸員 鯨井 秀伸	

2010.9.9（木） 13:10―13:25 於、愛知芸術文化センター

水谷 長志（東京国立近代美術館）

1. はじめに―本セミナー「美術情報・資料の活用―展覧会カタログから Web まで」の成立ちと目的

2. 美術館図書室 (Art Museum Library、以下 AML) の課題と責任

Museum as publisher ということ
「ミュージアムはきわめて旺盛な出版活動の主体である」

Museum publications について
「多様な出版物 活動の記録として永く残すべきもの vs 一時的なエフェメラ (ephemera)」

Museum publications へのアクセス可能性を考える
「灰色文献からの脱却」

eg. 展覧会カタログのアクセス可能性を考えてみる
↑
自館刊行物を共有財にするための課題と責任

ALC: Art Libraries' Consortium 美術図書館横断検索
『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ 2009.3

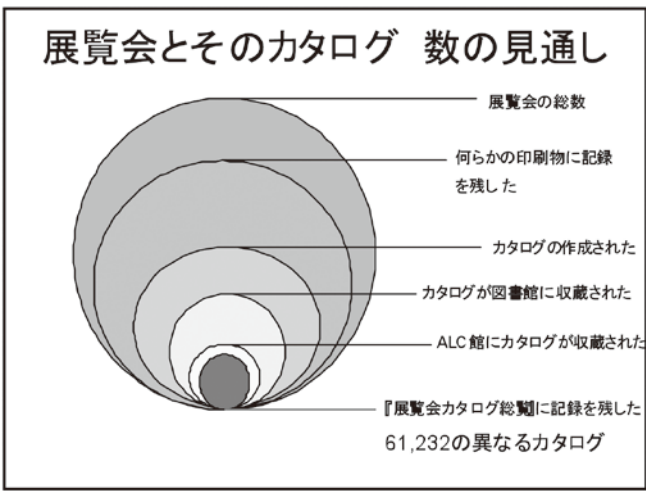
3. 提供と利用のはざまにおいて

publisher (writer) であり user (reader) であること

ミュージアムの資料担当の課題と責任

publisher (writer) side として
accessibility
[自館刊行物の] 提供可能性の範囲を自覚する
user (reader) side として
availability
[必要とする資料の] 利用可能性の回路を保証する

相互協力網の必要と設置義務／可能性の根拠



4. AML を担う人―どこもさほどの大差なく、同じような事で頭を悩ましているということ

AML のための場として [も], 全国美術館会議 情報・資料研究部会があるということ

5. 各論の構成

情報・資料業務を語る二側面

―資料論と組織化論
本セミナーの主力は前者の資料論
組織化論は第III講で「分類」と「目録」に限定して言及
さらに参加者の業務実態を踏まえ、
質疑の中から展開を期待！

第 I 講「展覧会カタログ」 資料論

第 II 講「美術の逐次刊行物」 資料論

第 III 講「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」 折衷論

第 IV 講「電子的リソース (二次資料) 」折衷論

第 V 講「電子的リソース (一次資料) 」資料論

第 VI 講「作品情報のアクセスと発信」システム化論

1. 展覧会カタログとは

1.1 展覧会カタログの定義

展覧会の目録
展覧会であることが判明・出品が同定できる
資料・（会期中に販売・配布）

1.2 展覧会の種類

目的 販売・宣伝／発表・コンクール／公開・陳列

形式 個展／グループ展／美術団体展／コンクール
展／常設展／企画展／巡回展／共催展

1.3 展覧会カタログの発展

戦後 小冊子から大型化／図版の割合の増加と
カラー化／体裁の多様化

論文・参考文献・各種資料等の充実／
バイリンガル化（学術的カタログ）

出版部数の増加／制作・編集方法の変化／
刊行形態の変化（展覧会終了後の刊行）

現在の展覧会カタログ 学術的なカタログの一般的構成
主催者あいさつ／概説／論文／作品図版／
作品データ（名称、作者、時代・制作年、
品質形状・素材、寸法、所蔵者、来歴、文献等）
／作品解説／年表・年譜／参考文献／
作家解説／用語解説／資料等

2. 展覧会カタログの取り扱い－資料的特性と管理

2.1 収集

2.1.1 美術の世界での灰色文献

- ・展覧会の会期中に販売され、発行部数も少なく、
図書としての一般の流通経路にのらない。
入手が困難。（洋カタログとの違い）

- ・著作権法第 47 条（美術の著作物等の展示に伴う
複製）上の小冊子？
レオナルド・フジタ展カタログ事件

2.1.2 収集方法

- ・入手のための情報収集はインターネットの普及に
より以前より容易に
- ・購入方法
ミュージアムショップ／共催新聞社／古書店
／図録ネット等
- ・寄贈・交換
網羅性・即時性・継続性・受入体制が課題
- ・JAC(Japan Art Catalog) プロジェクトのために開
設したアートカタログ・ライブラリー（1996 年
11 月－2004 年 10 月）の資料は、国立新美術館
に引き継がれ、事業継続
- ・美術館図書室のみならず、大学図書館等でも展覧
会カタログを収集
東京大学駒場美術博物館資料室 平成 19 年 (2007) 開室

2.2 整理

2.2.1 資料区分と配列（物理管理）

資料区分（配置）
一般図書との区別
パンフレット状のカタログの扱い

配列

- ・カタログという資料区分を設ける場合は独自の配
列が可能

分類順配列 同じ分類が集中／複合主題のものも
一か所にしか置けない
会場順配列 館コードの付与とその維持が必要
受入順配列 スペースの節約／ 検索手段が別に必要

2.2.2 目録・データ作成（情報管理）

目録の例

- ・国立国会図書館
- ・NACSIS-CAT ※国立情報学研究所（NII）が提供する
大学図書館等の総合目録データベース
- ・東京都現代美術館

目録作成のツール

- ・『日本目録規則 1987 年版改訂 3 版』日本図書館協会
目録委員会編 日本図書館協会，2006 ①
- ・『英米目録規則 (Anglo-American cataloguing rules, 略称 AACR2)
第 2 版 日本語版』日本図書館協会，1995
- NACSIS-CAT での目録作成のためのルールとして**
- ・目録システムコーディングマニュアル ②
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/MAN2/CM/mokuji.html
- ※展覧会カタログについてのマニュアルを定め、2006 年
6 月より運用
- ・「展覧会カタログに関する取扱い及び解説」③
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/exhb_toriatsukai.pdf
- ・「コーディングマニュアル（展覧会カタログに関する抜粋集）」④
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/exhb_cm.pdf

展覧会カタログの目録作成におけるポイント （NACSIS-CAT の例）

記 述

＜タイトル＞

- ・タイトルと責任表示の情報源
標題紙（標題紙裏を含む）、奥付、背、表紙 ①
- ・標題紙がない場合
→図書中にもっとも詳しい書誌情報が示されている情報源
を標題紙に代わるものとみなす。①
- ・標題紙、奥付、背、表紙に表示されている各タイトルが異
なる場合
→原則として標題紙を情報源とする。④
→共通する書名があればその書名を、なければ標題紙、奥
付、背、表紙の優先順位に従って本タイトルとして記録
し、他のタイトルは注記事項とする。①
- ・「特別展」・「○○記念展」などの冠称の扱い
→タイトル関連情報（サブタイトル）とする。④
→TR フィールド（タイトルと責任表示）に記録すること
ができるのは、本タイトルと同一個所に表示されている
タイトル関連情報のみ。それ以外の個所に表示されてい
るタイトル関連情報は、VT フィールド（その他のタイ
トル）に記録する。②
- ・年次・回次の扱い
→VOL フィールド（巻冊次等）②

＜責任表示＞

- ・個人の著作か団体の著作かが不明
→人名の場合の肩書き・所属団体名等は省略。①
- ・巡回展・共催展などで、責任表示が多数ある場合
→同一の役割の責任表示の数が 3 までのときは、そのま
ま記録、4 以上の場合には、一つだけを記録し、他は省
略することができる。また、省略された責任表示は
NOTE フィールドに記録する。②

＜出版事項＞

- ・出版地・出版者が資料本体に表示されていない場合、開催
地・会場名を出版地・出版者として補記する。④

＜形態に関する事項＞

- ・ページ付のない場合、1 冊とする。大きさは cm 以下を切
り上げる。変形本は縦 × 横 ①

＜注記＞

- ・会場・会期、主催者など展覧会カタログに固有の情報
→NOTE フィールドに記録する。④
- ・「展覧会カタログ」ないし「展覧会カタログ（出品目録）」である
ことを注記。
- ・展覧会の出品作家（3 名程度）、企画・主催者（3 つまで）を記録。
- ・展覧会の会期・会場に関する情報を記録。巡回展の場合は 3
会場まで。
会期・会場は、図書以外の情報から補うこともある。

アクセスポイント（標目）

＜著者標目＞

- ・下記についての AL フィールドを作成する。④
- 1) 展覧会カタログの編著に関わった個人あるいは団体
- 2) 展覧会に出品した作品等の制作者である個人あるい
は団体（出品作家）
- 3) 企画・主催等において展覧会の開催に関与した個人
あるいは団体
- 4) 単館展の場合に会場となった美術館等団体

＜件名＞

- ・一般的な件名表 NDLSH(国立国会図書館件名表) と
BSH(基本件名標目表 日本図書館協会)
件名目録はカード目録の時代にはあまり作成されず。
コンピュータ目録では今後、重要となる。
- ・「展覧会カタログ」という件名を記録。また、出品作家およ
び単館の所蔵作品のみで構成する展覧会の場合における所
蔵館名などを件名とする。④

＜分類＞

- ・一般的な分類法 NDC(日本十進分類法)
書架分類(書架に配列する際の分類)と書誌分類(書
誌データ上の分類) の両方に使える。
- ・独自分類 採用する館もある。維持に労力がかかる。

2.3 保管・保存

- ・保管場所・方法に配慮必要
- ・廃棄の問題浮上
- ・作成館での保存の責任 館の活動の記録

3. 展覧会カタログの利用

3.1 利用の目的

展覧会（催事）情報の情報源
展覧会出品歴の情報源
作品情報の情報源（作品データ・画像・参考文献）
作家に関する情報源（年表・年譜・著作物採録）
レファレンスサービスの情報源
最新の研究動向の入手

3.2 展覧会カタログの検索

目録（刊行物）

- 『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ株式会社編
日外アソシエーツ（紀伊国屋発売），2009.1　2冊
東京国立近代美術館・横浜美術館・国立西洋美術館・東京都
写真美術館・国立新美術館・東京国立博物館・東京都江戸東京
博物館の7館が収集した展覧会のカタログ61,300点を分類別
に配列し、開催年や会場会期、主催者および所蔵館を掲載。
巻末に人名・事項名索引と、主催者名索引を付す。

- 『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録　日本語
（本文編）・日本語（索引編）』東京都現代美術館普及部図書
情報係（美術図書室）編　東京都現代美術館，2000.3-2001.2　2冊

- 『東京文化財研究所蔵書目録　6（上）展覧会カタログ
目録編：1888-2004年開催分）-6（下）展覧会カタログ
索引編』東京文化財研究所情報調整室資料閲覧室編　文化財研
所東京文化財研究所，2006.3

- 『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録』
東京文化財研究所，2002.3 CD-ROM1枚

- 『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録
画廊関連データ』
[文化財研究所東京文化財研究所]，2006.3　CD-ROM1枚

- ・特集：国立国会図書館所蔵戦前期美術展覧会関係資
料目録』石渡裕子『参考書誌研究』第50号　国立国会図書館専門
資料部，1999.2

- ・*The Worldwide bibliography of art exhibition
catalogues, 1963-1987*. vol.1-3. Millwood, Kraus
International, 1992　3v.

- ・NDL-OPAC（国立国会図書館）
http://opac.ndl.go.jp/
- ・NACSIS Webcat（国立情報学研究所）
http://webcat.nii.ac.jp/
フリーワードに「展覧会カタログ」と入力して
検索すると49,865件ヒット（2010.8.25確認）

- ・美術図書館横断検索（ALC）
http://alc.opac.jp/
下記の機関の展覧会カタログを含む蔵書を横断検索
- ・東京国立近代美術館アートライブラリ　平成14年（2002）年開室
- ・同工芸館図書閲覧室　平成14年（2002）年開室
- ・同フィルムセンター図書室　平成7年（1995）開室
- ・国立新美術館アートライブラリー　平成19年（2007）開室
- ・東京都現代美術館美術図書室　平成7年（1995）開室
- 昭和50年（1975）開室の東京都美術館美術図
書室の蔵書を引き継ぐ
- ・横浜美術館美術情報センター　平成元年（1989）開館
- ・国立西洋美術館研究資料センター　平成14年（2002）開室
- ・東京都写真美術館図書室　平成7年（1995）開室
- ・東京国立博物館資料館　昭和59年（1984）開館
- ・江戸東京博物館図書室　平成5年（1993）開館

- ・展覧会カタログ検索（東京文化財研究所）
http://archives.tobunken.go.jp/internet/cbkensaku.aspx
27,763件（2009.12.3更新）
会場名・展覧会名・開催年（単年度のみ）から検索

複　製

- ・『近代日本アート・カタログ・コレクション』
ゆまに書房，2001-
明治初期～戦前の展覧会カタログの復刻。
- ・近代デジタルライブラリー（国立国会図書館）
http://kindai.ndl.go.jp/
明治・大正期刊行図書の資料本文をデジタル
画像で閲覧できるサービス

3.3 展覧会の出品情報の検索

目録（刊行物）

- ・『内国勸業博覧会美術品出品目録』
東京国立文化財研究所美術部編　東京国立文化財研究所，1996
- ・『明治期万国博覧会美術品出品目録』
東京国立文化財研究所美術部編　東京国立文化財研究所，1997
- ・『明治期美術展覧会出品目録』
東京国立文化財研究所美術部編　東京国立文化財研究所，1994

- ・『明治期府県博覧会出品目録』明治4年～9年
東京文化財研究所美術部編　東京文化財研究所，2004.3
- ・『大正期美術展覧会出品目録』
東京文化財研究所編　東京文化財研究所，2002
- ・『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』
東京文化財研究所美術部編　東京文化財研究所，2006
- ・『日展史』1（第1回文展：明治40年）～41（改組第10回日展：
昭和53年）　1980-2002　日展，1980-
- ・『日展史資料』日展史編纂委員会編　日展，1990　2冊
1 文展・帝展・新文展・日展全出品目録　明治40年-昭和32年
2 文展・帝展・新文展・日展全出品索引　明治40年-昭和32年
- ・『美術家索引（日本・東洋篇）』
恵光白編　日外アソシエーツ（紀伊国屋書店発売），1991.12

3.4 展覧会情報の検索

3.4.1 開催中の展覧会

- ・Museum-Café（廣齊堂）
http://www.museum-cafe.com/
採録対象　全国600の美術館
展覧会は、地域、ジャンル、開催期間から検索
2001以降対象

- ・アートコモンズ（国立新美術館）
http://artcommons.nact.jp/　（2007年3月開設）
全国541の美術館、34の美術団体、39の画廊の展覧会情報
展覧会は、会場、展覧会名、地域、会期、ジャンル、キーワー
ド等から検索　2000以降の情報蓄積

- ・インターネットミュージアム（丹青社）
http://www.museum.or.jp/
展覧会・イベント情報はキーワード、イベント分類、地域、
館種（ジャンル）、期間から検索

- ・Artscape（大日本印刷）
http://artscape.jp/exhibition/index.html
美術情報のwebマガジン（毎月1,15日更新）
展覧会ピックアップ／展覧会スケジュール等

3.4.2 過去の展覧会

- ・『日本美術年鑑』明治43年（1910）～
美術展覧会、美術展覧会図録所載文献および定期刊行物所載文
献目録の総説とその他（美術関係者、書評、時評、海外展）の
部分において、古美術と近現代美術に分けていたデータを統合
した。（平成12年度より）
- ・『日本の美術展覧会開催実績 1945-2000 報告書』
中島理壽監修　アートカタログ・ライブラリー，2003

- ・『日本の美術展覧会開催実績 2001-2003 報告書
_平成15年度文化庁委嘱事業』
国際文化交流推進協会アートカタログ・ライブラリー，2004
- ・『日本の美術展覧会開催実績 2004-2005 報告書』
[中島理壽編] 国立新美術館，[2008]
- ・近現代美術展覧会開催情報（東京文化財研究所）
http://archives.tobunken.go.jp/internet/exkensaku.aspx
1935年から2010年までに主に日本国内で開催された近現代
美術関係の展覧会開催情報179,256件（2010.5.7更新）
展覧会名、会場、開催年から検索
- ・各美術館・博物館刊行物
『国立西洋美術館展覧会総覧』
国立西洋美術館編 国立西洋美術館，2009

- ・各美術団体の団体史
- ・雑誌記事

3.5 その他の情報を探す

展覧会カタログの中の論文

- ・ALC 参加館 OPAC で検索

- ・美術関係文献検索（東京文化財研究所）
http://archives.tobunken.go.jp/internet/oakensaku.aspx
展覧会カタログも採録の対象
古美術関係1966～2006年、
近現代美術関係1935～2006年　397,219件（2010.4.28更新）
編著者・キーワード・雑誌名（カタログは書名）からの検索

展覧会カタログの中の美術家書誌

- 『美術家書誌の書誌：雪舟から東芋、ヴァン・エイクか
らい・ブルまで』中島理壽編 勉誠出版，2007.12

4. その他

- ・他の展覧会関連資料
エフェメラ類・調査関連資料・広報資料などの扱い
→アーカイブ化の必要

- ・国会図書館や公立図書館等への寄贈

- ・展覧会出品作品情報の共有

紹介：展覧会カタログに関する文献リスト 吉川恵子，長屋俊，水谷
長志編著　2007
http://www.momat.go.jp/art-library/art-library-guide/exhcatbiblio.html

1. 美術館と「逐次刊行物」	2.1. 美術館が刊行する逐次刊行物について
1.1 逐次刊行物とは何か	2.1.1 種類
1) 継続的に分冊として刊行され、あらかじめ完結の期限を定めていない	年報・館報 / 紀要 / ニュース・たより / 研究報告・調査報告
2) 各分冊には、刊行順序を示す巻号などの表示がある	2.1.2 それぞれの逐次刊行物の動向と問題点
3) 同一のタイトル(標題)で、通常は同一の形態	【年報・館報】
4) 定期刊行物と不定期刊行物がある	内 容
	・ 設立趣旨 / 沿革
	・ 事業
	展覧会 / 教育普及・イベント / 保存・修復 / 作品貸出 / 館外事業 / ボランティア・友の会の活動 / 出版物
	・ 利用統計
	入場者数
	・ 所蔵資料
	新収蔵（作品・図書資料） / 所蔵資料の統計（作品・図書資料）
	・ 関係法規
	・ 組織・職員
	・ 利用案内
	・ 研究・調査報告 [紀要を刊行しない館]
	・ 個人の業績（調査研究）
2. 出版者としての美術館	構 成
美術館は / 私たちは「何を」「誰に」伝えたいのか？	→データ中心（表が多い） / 記述中心 / データの中に記述が入っている
連続して刊行される以上は、一定の編集方針があるのか？	
様々な事例を通して、美術館が刊行する逐次刊行物について考える	

レイアウトやページ数	2.2 美術館は何故逐次刊行物を刊行するのか？
→予算が厳しいのか？省力化なのか？	2.2.1 博物館法との関係
タイトル表示	(博物館の事業)
→タイトル変更なのか？ 単なる表紙デザインの変更なのか？	第三条の六 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。
展覧会の出品リストを掲載しない	(運営の状況に関する情報の提供)
→本当に展覧会カタログを見れば良いのか？	第九条の二 博物館は、当該博物館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該博物館の運営の状況に関する情報を積極的に提供しよう努めなければならない。
新収蔵作品の写真を掲載しない	2.2.2 美術館の活動の成果をアピールする
→作品同定の困難さ	匿名性（無署名記事）と個人名表示の問題
目次がない / ノンブル表示がない [論文を収載しているにもかかわらず]	2.2.3 情報の共有化
→単なるミスなのか？	美術館員は、他館の逐次刊行物をどれくらい読んでいるのか？ 情報の蓄積と検索の問題 / 総目次 頒布先について
頒布先	3. 利用者としての美術館
→国立国会図書館、大学図書館、美術館	美術情報にアクセスするための逐次刊行物の検索について（今回は和雑誌に限定）
【紀 要】	3.1 美術雑誌・紀要のタイトル検索
継続刊行の困難さ	・ 美術雑誌データベース (アート・ドキュメンテーション学会美術雑誌 SIG) http://www.jads.org/db/bijutsu_zasshi/search.htm
→収載論文が1点だけ、1～2号で休刊、合併号で刊行	※1,307件。ただし、明治、大正、昭和戦前期の雑誌はよく調査されているが、比較的新しい雑誌や学会、美術館、大学等が発行する雑誌は収載されていない。 (アートトップ、絵、三彩、美術手帖など)
頒布先	
→国立国会図書館、大学図書館、美術館	
【ニュース・たより】	
位置付け・役割の変化	
→広報媒体への移行、記事の収載、総目次	
頒布先	
→国立国会図書館、大学図書館、美術館	

・東京文化財研究所蔵書目録 5
(上) 和雑誌目録編・(下) 和雑誌索引編
(2004 年 12 月末日現在) 約 3,000 種

→東京文化財研究所ウェブサイトの「和雑誌データベース」
(最終更新日：2009 年 12 月 2 日 /
登録数：タイトル数 2,772 種、80,706 冊)

3.2 雑誌記事・論文記事の検索

・日本美術年鑑 (東京文化財研究所 各年で調査 / 最新：
2007 年 1 月～12 月の定期刊行物所載文献を収録)

→東京文化財研究所ウェブサイトの
「美術関係文献検索」
※『日本美術年鑑』掲載文献に、さまざまな理由
で年鑑に掲載されなかった文献を加えたもの。
校正中のためにデータに不備がある場合がある。
特に 1997 年、2004 年の展評は不完全。また、
Mac には対応していない。
最終更新日：2010 年 4 月 28 日
古美術関係 1966 年～2006 年、
近現代美術関係 1935 年～2006 年 397,219 件

・雑誌記事索引 人文・社会編 (国立国会図書館 1995
年まで冊子体で刊行)

→国立国会図書館ウェブサイトの
「雑誌記事索引」
※美術雑誌以外の雑誌に掲載された
雑誌記事を調べることができる

・総目次 / 目次総覧 / 総索引など

主なもの
美術関係雑誌目次総覧, 小林忠編, 国書刊行会, 2000.5
「白樺」総目次 [複製版「白樺」の別冊], 深萱和男編,
臨川書店, 1972.8 等々

3.3 美術雑誌の所在の検索

・美術図書館横断検索 (Art Libraries' Consortium)

http://alc.opac.jp/

・NACSIS Webcat (国立情報学研究所)

http://webcat.nii.ac.jp/

・NDL-OPAC (国立国会図書館)

http://opac.ndl.go.jp/

3.4 パソコンによる雑誌記事・論文記事の申請・入手

・国立国会図書館の登録利用者制度
→郵送複写サービス

4. 整理・保管について

・他館が刊行した逐次刊行物

→整理・保管のためのスペースや人員があるのか
どうか

・自館が刊行した逐次刊行物

→実は、自館の逐次刊行物を一番使うのは自分たち

5. 最後に

美術館にとって「逐次刊行物」とは？

美術館の活動の実態を反映しているのは、逐次刊行物
なのかも知れない。

逐次刊行物に表れているのは、展覧会のような目立つ
活動だけではない、外からは見えにくい、日々の地道
な活動とその有り様なのかも知れない。

逆に言えば、逐次刊行物は、美術館がどんな活動をし
ているのか / してきたのかを知るための唯一の手がか
りでもある。

逐次刊行物を編集・制作する時に、私たちが持つのは、
その時々で消費される情報という意識であるのか、永
く残すべき記録という意識であるのか？

美術館に戻った時、自館の刊行している逐次刊行物を
手に取って、今どうなっているのか、昔はどうだった
のかを考えましょう。

1. AML 美術館の中の図書室は図書館界の中のどこに位置するのか

図書館の「館種」と職能組織

「公共」「学校」「大学」「専門」

専門図書館協議会

アート・ドキュメンテーション学会

ALC：Art Libraries' Consortium

ARLIS：Art Libraries Society

2. 書誌情報の流通と共作・共有・共用

「資料」が使えるとはどういうことか
5つのポイントを整理しておこう

Publishing 資料の出版

Distribution 資料の配付 / 頒布

Cataloging 資料の目録化（書誌データの作成）

Dissemination 書誌情報の配布 / 流通

Holding 〔公開可能を前提とする〕資料の保有

労働集約型と考えられる Cataloging について

「書誌情報」はシェアするもの

なぜならば…

図書館の蔵書「目録」と美術館の藏品「目録」
Copy と非 Copy(Uniqueness)

一冊の本には一つの書誌情報が作成されれば、

← あとは…Copy cataloging
コピペもあり〔というよりもコピペが基本〕

書誌情報は

共作して、共有しながら共用する

共有 share とは
whole cake を
みんなで作り
そして、いただくイメージ書誌データ共用装置としての書誌ユーティリティ
bibliographic utility

日本：NACSIS-CAT

→ 4.2.2 目録を考える－書誌データの作成…
→ 6. OPL の見切りについて－何を残すか…

3. 現代の図書館、ホットな話題

インターネットと図書館－相克は「館」の開放か希薄化か

3.1 旧来の文献アクセス

多くは、論文を読んでその註または参考文献を辿って
(芋づる式に) 探し始める ≒ 既知検索OPAC(自館の、国立国会図書館、Webcat、ALC、地
元の図書館、などなど) を検索

所蔵確認ができたなら所蔵館へ出向いて閲覧、Get!

3.2 Open Access の登場

機関リポジトリ (IR: Institutional Repository)
JAIRO (機関リポジトリ ポータル
Japanese Institutional Repositories Online)
CiNii経由で文献アクセスして、
公開サーバ上の全文ファイルを Get !

3.3 Deep Web 浮上せよ

－ Google クロール済みの CiNii

ググって全文 PDF 等 Get !

例：「岡倉天心による「泰西美術史」講義（明治二十九年）
についての考察（その一）」可視性 (visibility) 向上のための工夫、努力、競争
－publish of perish は STM の世界だけでなく
評価の時代に入った美術館← 業界内評価を越えなければ
UAP: Universal Availability of Publications なのだ！

3.4 相克は「館」の開放か希薄化か

「図書館には Google では探せない資料がある、
だから図書館を使おう、そしたら図書館は生き残れる」↓
「図書館が提供できる資料は全部 Google で検索できる
ようにしよう、そうしたら図書館を使うだろう、つい
でに図書館資料をデジタル化して web に公開しよう、
すべてのデジタル化が終わるまでは、そのプロセスの
過程において〔のみ〕図書館は生き残るだろう」↓
利用者はデジタル化された資料が、図書館だろうが
CiNii だろうが IR だろうが、「誰の提供か」は意識し
ない参考：
「電子図書館と「館」の希薄化 - 物理的な、あるいは電子的な」
Min2-fly(last update 2008-05-16)
http://www.myopenarchive.org/documents/swffull/61
国立情報学研究所 "NIIPress07_4-1".
http://www.nii.ac.jp/kouhou/NIIPress07_4-1.pdf

4. AML の資料論と組織化論

4.0 AML における各論に入る前に
－何が困難なのか、課題なのかを考える

資料論	≒	資料知識
組織化論	≒	ノウハウ
環境	≒	人・もの・金・空間
ユーザ	≒	誰のための
Goal	:	ミクロとマクロ
貢献	:	国内 美術界 学術 一般 海外

4.1 AML における資料論

今回のセミナーはどちらかというと
AML の資料論から展開
「展覧会カタログ」「逐次刊行物」「二次資料」「一次資料」

AML の資料の多様性：以下に主な参考文献

Pacey, Philip ed. *Art Library Manual: A Guide to
Resources and Practice*. Bowker, 1978.Ford, Simon ed. *Information sources in art, art history
and design*. K.G. Saur, 2001.Benedetti, Joan M. ed. *Art Museum Libraries and
Librarianship*. Scarecrow Press, 2007.水谷「美術情報」『情報探索ガイドブック情報と文献の森の
道案内』勁草書房、1995.9、所収4.2 AML における組織化論－「分類」と「目録（書誌
データの作成及び OPAC について）」の要点

4.2.1 分類を考える－図書館分類は「集類」

同種の主題の本を書架の同一の箇所に集める
「便宜的」な方法であって、
植物分類のような「学問分類」とは異なる。
「分類」というより「集類」である。参考：
『情報選択の時代』リチャード・S. ワーマン著 松岡 正剛 訳
五つしかない情報の組織化の方法「究極の五つの帽子掛け」
L. 位置 (location)
A. アルファベット (alphabet)=50 音順
T. 時間 (time)
C. カテゴリー (category)≒分類
H. 連続量 (hierarchy) 小→大など
Latch=掛け金

「同一の箇所に集める」ことの必要性	A ならば： 既成図書館システム導入、OPAC 公開、NACSIS-CAT 参加、それが無理でも ALC に参加しよう
ある： ブラウジングのため 検索のための目録が整備できないため 書架に余裕があるから 分類配架は常に 30% の空白が必要	B ならば： 既存図書館システム導入、OPAC 公開、ALC に参加しよう、それが無理でも ALC に寄贈しよう
ない： 検索のための目録が整備できる OPAC が使える 検索画面でブラウジング 請求記号 (Call number) に従って 現物に到着可 書架に余裕無し 最も効率的な配架は空白のいらない配架 非分類配架 ≒ eg. 時順配架	B ならば： 自館刊行物データをテキストで良いから HP に掲載公開しよう、その上で ALC に寄贈しよう
以上を勘案して分類を考える 採用するならば NDC 、以下 1 ～ 2 桁	C ならば： とりあえず、分類して棚に並べよう そのためには何が必要で何が不要かをぎりぎりまで考えよう ただし、自館刊行物を国立国会図書館と NACSIS-CAT に参加の ALC のいずれかに寄贈しよう 自館刊行物が自館外のどこかで、国立国会図書館、webcat、ALC で検索可能になれば良い

参考『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 本文編 / 索引編』（同館、2000-2001）

4.2.2 目録を考える
ー書誌データの作成から OPAC の公開へ

考えておくべき前提 ← 何にマンパワーを注ぐことが最大多数の最大幸福を生むか

- ・他館刊行物、商業出版物の書誌データはコピペして Excel、FM、図書館システム、何でも良いから貯める 盗用も可也 公開 / 検索のための手段 / 方法 / 工夫は多様にある
- ・自館刊行物の書誌データは、発行館の他にないと思い作成する
- ・もしくは、発行館が作成せず、公開 / 検索可能な館へ委ね、共作、共有、共用のラインに載せることを考える

問 1 書誌データ作成の環境

- A: 全蔵書の書誌データを作成し公開するための人・金・空間がある
B: 自館刊行物に限れば書誌データを作成し公開するための人・金・空間がある
C: 蔵書の書誌データを作成する人・金・空間がない

問 2 資料へのアクセス路要求

- A: 自席の PC で検索して
館の蔵書が把握できればよい
B: 主題ごとに分類された棚の前に行って
本を探したい ブラウジングしたい

A ならば：
OPAC 必要 棚が無くても何とかなる

B ならば：
OPAC 不要 しかし 分類配架が必要 棚に余裕が必要

問 3 書誌データの公開要求

- A: 検索は美術館内部だけで良い インターネットに公開するなんてとんでもない
B: 検索は広く世界から OPAC はインターネットに公開するのが当然

A ならば：
イントラネットで html を作り Ctrl+F でも検索可
元は Excel でも FM でも何でも良い

B ならば：
最低限の既存図書館システムの導入を OPAC 公開
サーバは ASP でも可 ALC の半数は opac.jp

5. 美術館の中のライブラリの機能構造化のための尺度を考える	
マンパワー	
蔵書の量	
保管のスペース	
利用者像	
美術館のパブリッシング力	
他機関依存可能性	
6. OPL の見切りについて — 誰の、誰による、誰のための図書館 何を残すか、何を担うか	

OPL : One Person Library / Librarian

One Person を確保するための作戦を

当面の Goal として

「自館刊行物を共有財にするための課題と責任」

から発想してみよう！

↓

これを実現すれば

日本の美術館の MP の UAP は実現する

第Ⅳ講 「電子的リソース（二次資料）」

2010.9.10（金） 9:40—10:40 於、愛知芸術文化センター

水谷 長志（東京国立近代美術館）

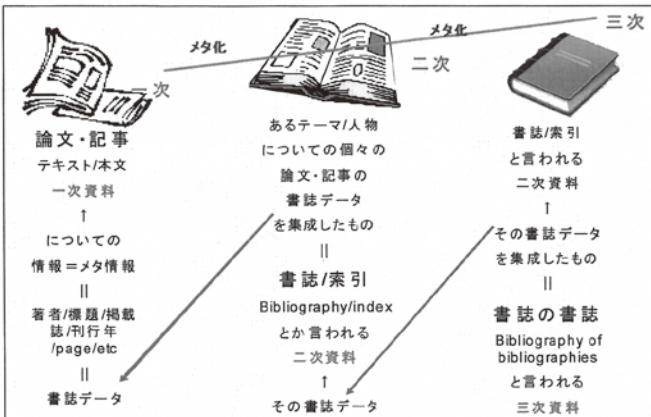
1. 資料・情報のn次性―「第二の知識」藤川正信著『第二の知識の本』新潮社 1963

Knowledge is of two kinds. We know a subject ourselves, or we know where we can find information upon it.

James Boswell. *The Life of Samuel Johnson*. 18 Apr. 1775.

「知識には二種類あって、我々は或る主題を自分で知るか、それともこの主題についての情報がどこでえられるかを知るかです。〔我々が何かを調べようと思う時にまず最初にせねばならぬことは、いままでにどんな本がこの主題を取扱ったかを知ること、我々がカタログを検索したり、図書館の書物の背表紙を通覧するのはこのためです。〕」

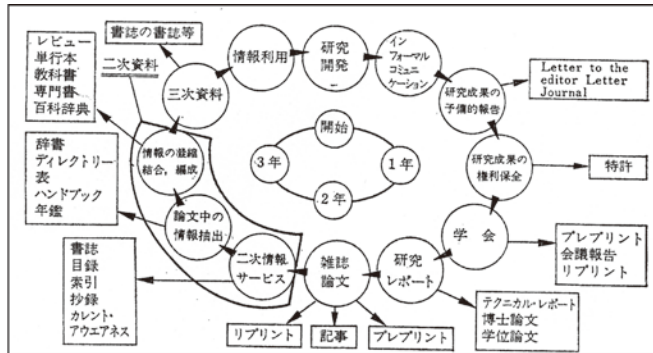
↑
図書館機能の本質：
忘れてはならないこと / 頭に入れておくこと



2. レファレンス・ツール概観*

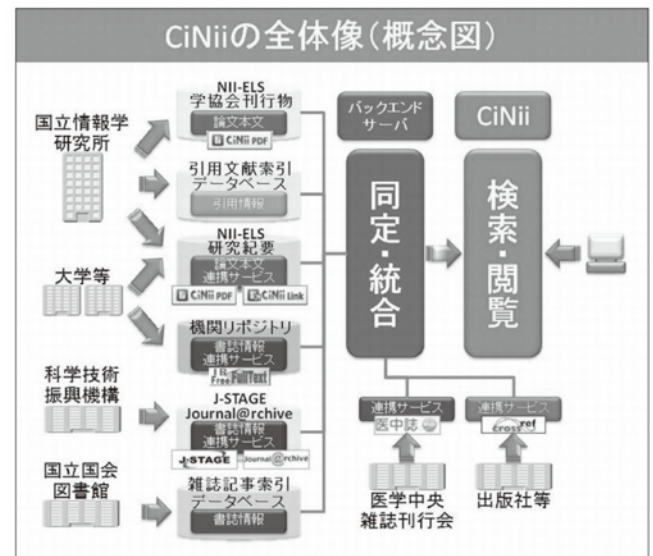
種類		紙媒体:事例	Web 媒体:事例
一般的 包括的 二次資料	全国書誌	『日本全国書誌』 Japan/MARC National Bibliography など	国立国会図書館 OPAC
	販売書誌	『日本書籍総目録』『出版年鑑』 Books in Print など	http://www.books.or.jp/ Amazon?
	所蔵目録	『国立国会図書館蔵書目録』 など	国立国会図書館 OPAC
	総合目録	『学術雑誌総合目録』 など	Webcat
	叢書集成索引	『現代日本文学綜覧シリーズ』 など	日外アソシエーツ
	一般記事索引	『国立国会図書館『雑誌記事索引』 など	国立国会図書館雑誌記事索引 NII CiNii**
	百科事典	『平凡社世界百科事典』 など	オンライン百科事典
専門的 関連主題の 二次資料	主題書誌 個人書誌	掲載媒体は様々	
	専門記事索引誌 専門記事抄録誌 A&I Service (Abstracting & Indexing)	『日本美術年鑑』に掲載のもの Art Index BHA ABM DAAI etc.	東文研「美術関係文献検索（試験運用版）」 Art Index BHA ABM DAAI etc.
	総目次・総索引 総目次の総覧	『みづゑ』ほか様々 『美術関係雑誌目次総覧』国書刊行会 『現代の眼』 『日本雑誌総目次要覧』	東近美アートライブラリ閲覧端末『現代の眼』総目次検索***
	専門事典・便覧	『新潮世界美術辞典』 TDA	OAQ: Oxford Art Online
	三次資料	書誌の書誌	『美術家 書誌の書誌』 勉誠出版
参考図書の解題書誌		『日本の参考図書』 Guide to Reference Books Guide to the Literature of Art History	

K. Subramanyan の Scientific Literature 学術の螺旋的發展



* インターネット で文献探索 実践女子大学図書館 などでお復習いを
http://www.jissen.ac.jp/library/frame/index.htm

**CiNii のこと 国立情報学研究所 NII 学術系コンテンツサービス
http://www.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&page_id=84
を一度ご覧下さい 特に IR, JAIRO, CiNii, PORTA(NDL) の関係を整理しておくとかと重宝



データベース名 (提供機関)	略号	解説	収録件数/収録雑誌
NII-ELS 学協会刊行物 (国立情報学研究所)	NII-ELS	◎論文本文へのリンクあり ◎抄録があれば収録 国内の学協会が発行する学術雑誌に掲載された論文について、ページをそのまま画像データ(PDF形式)として蓄積。本文の参照を可能にしたデータベースです。 ※本データベースの一部は科学研究費補助金(研究成実公開促進費)データベース(学会発表プレプリント電子ファイルおよび 電子図書館蔵書データベース、臨床症例データベース)の交付を受けて作成しています。 収録期間は雑誌により異なります(電子化が完了した範囲による)	約292万件 収録雑誌は一覧
NII-ELS 研究紀要 (各大学の共同入力)	NII-ELS	◎一部論文本文/外部リンクあり ◎一部抄録あり 国内の大学等が発行する研究紀要に掲載された記事情報を収録したデータベースです。 収録期間は雑誌により異なります	約96万件 収録雑誌は一覧
引用文献索引データベース (国立情報学研究所)	CIPI(用) 注1	◎引用情報があれば収録 国内の自然科学分野の学術論文は、学協会刊行物に掲載された論文について、論文とその論文が引用している文献との関係がわかるように作られたデータベースです。 収録期間は1992年～、雑誌により異なります	雑誌:約147万件 引用:約1593万件 収録雑誌は一覧
雑誌記事索引データベース (国立国会図書館)	NDL: 注2	◎書誌情報のみ 国立国会図書館が収蔵する国内刊行物の雑誌のうち、学術誌・大学紀要・専門誌を中心として、人文・社会/科学/技術/医学/農学と、あらゆる分野の記事に関するデータを収録した国内最大の記事索引データベースです。	約807万件 収録雑誌は一覧 (国立国会図書館蔵書目録参照)
機関リポジトリ (各大学)	IR:	◎論文本文へのリンク	約23万件
J-STAGE Journal@rchive (株式会社法人科学技術振興機構)	J-STAGE Journal@rchive:	◎論文本文へのリンク	約4万件

2009年4月現在

3. 日本の美術界の二次資料とその電子化 左頁表斜体

*** 個別館 OPAC の中の (雑誌) 記事情報 東近美 OPAC の場合：
東近美開催展カタログ所収論文等記事 / 東近美研究紀要 / 現代の眼 / 愛知県美研究紀要 / 構造 / 近代画説 / 西洋美術研究 / 横浜美研究紀要 / 美術フォーラム 21 / 西美研究紀要 etc.

4. 海外の美術界の二次資料とその電子化 左頁表斜体

Matsumoto Shunsuke

09478 Shunsuke Matsumoto exhibition 1986. Tokyo: National Museum of Modern Art (5 April-15 June 1986)/Iwate, Japan: Iwatekenmin Kaikan (28 June-20 July 1986)/Shimonoseki, Japan: City Art Museum (26 July-24 Aug. 1986). Organized by Tokyo Shim-bun and Iwate Nippo. Kunio Motoé, Tōru Asano. 244p. Also in Japanese. 304 illus. (159 col.) biog. bibliog.
Catalogue to an exhibition of paintings and drawings by Shunsuke Matsumoto (1912-48), with two essays. Motoé discusses Matsumoto's choice of style and subject matter, with particular emphasis on his cityscape paintings, and noting the influence on him of Modigliani, and the montage technique which is reminiscent of Hideo Noda. There is also a short essay by Asano (in Japanese only) on Matsumoto's essay 'A living painter'.

図6 A B M抄録例<展覧会カタログ>

「松本峻介展」1986 於、東京国立近代美術館 他
Vol. 19, No. 2(1988)より

表1 主要抄録・索引誌およびオンライン・データベース

タイトル	RAA	Art Index	A B M (OMA*, 1969-70)	R I L A	B H A
プロデューサー 冊子体刊行 冊子体刊行頻度 収録件数/年 収録誌数/巻 収録誌数/年 果検索引版	CNRS**, FRA V. 1(1910)~V. 80(1990) 4/ year +/- 10,000 +/- 500 +/- 2,100	H. W. Wilson, USA V. 1(1930) + 4/ year +/- 20/23,000 +/- 230 annual index	ABC-CLIO, GBR V. 1(1969) + 2/ year 13,000 +/- 300 500 5 year index (1969-84) 3 year index (1985-)	J. P. Getty Trust, USA V. 1(1975)~V. 15(1990) 2/ year +/- 10,000 + 300 + 500 V. 1/4 (1975/79) V. 6/10 (1980/84)	Getty, USA; CNRS*, FRA V. 1(1991) + 4/ year 24,000 ? *** 208/267 (Vol. 1, No.1/2) 4,000 2*** annual index (1992 ? -)
Index: Author Index: Subject Index: その他	○ ○ French ○ English ○ French ○ English ○ English / French	○ Subjectと混同 ○ English ○ English ○ English ○ English / French	○ ○ English ○ English ○ English ○ English / French	○ ○ English ○ English ○ English ○ English / French	○ ○ English ○ English ○ English ○ English / French
※					
ディストリビュータ	QUESTEL, Chap. 180, model	WILSONLINE, CD-ROM	DIALOG (File 56)	DIALOG (File 19)	DIALOG (File 190; QUESTEL
オンライン・データ	1973+	1984+	1973+	1973+	1973+
更新頻度	4/year	2/week (CD 4/yr)	2/year	2/year	4/year
データベース収録	208,000/ QUESTEL	208,000/ WILSONLINE	208,000/ DIALOG	208,000/ DIALOG	208,000/ DIALOG

水谷「美術研究における抄録・索引誌の動向―BHA の創刊をめぐる」『ファッションドキュメンテーション』2号, 1992.6, p.39-54.

東京国立近代美術館アートライブラリ **** にて利用可能海外美術情報データベース

http://www.momat.go.jp/art-library/foreign_art_db.html

■ABM: Artbibliographies Modern on WEB/CSA Illumina 版

⇒近現代美術のための抄録・索引情報/1974-Current【詳しくは】by CSA

■Avery: Avery Index to Architectural Periodicals/CSA Illumina 版

⇒建築のための抄録・索引情報/1934-Current【詳しくは】by Avery

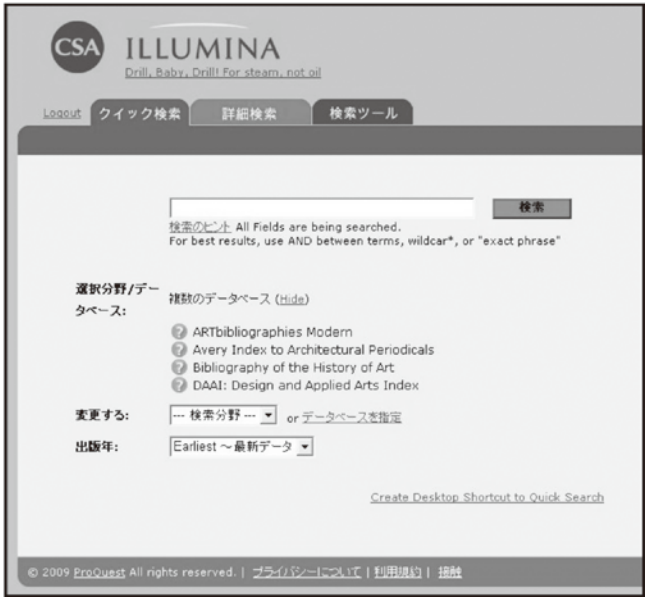
Architectural & Fine Arts Library of Columbia Univ., New York

■BHA : Bibliography of History of Art on WEB/CSA Illumina 版

⇒西洋美術全般のための抄録・索引情報/1973-Current【詳しくは】by

AHIP/J. Paul Getty Trust & INIST/CNRS Sterling & Francine Clark Art Institute

■DAAI: Design and Applied Arts Index on WEB/CSA Illumina 版
⇒デザインのための抄録・索引情報/1973-Current【詳しくは】by CSA



■の ABM, Avery, BHA, DAAI/CSA Illumina 版は横断検索可能

●TDA :Grove's The Dictionary of Art on WEB
⇒グロープ社美術事典の WEB 版【詳しくは】

**** 美術図書館学，アート・ドキュメンテーション関連文献のための
のクリアリングハウス機能を持ち，特に ARLIS, VRA 関連文献を網
羅的に収集している

国立西洋美術館研究資料センターで利用可能な他の海外書誌情報
データベース

Art Index
Art Index Retrospective: 1929-1984
Art Sales Catalogues Online

※JSTOR は東京国立近代美術館，国立西洋美術館とも利用可能
詳しくは第Ⅴ講(川口)にて

5. 日本の美術館の資料活動が目指す二次情報提供サービスの構築について

問1 とりあえずは美術館で

A：東京文化財研究所の活動(研究資料データベー
ス検索システム)と協調路線を強化する
http://archives.tobunken.go.jp/internet/index.html

B：とりあえず射程に置かない

B：で仮説する

総論： 自館刊行物を共有財にするための課題と責任
Access to Museum publications

「自館刊行物へのアクセス可能性は保証されて
いるか」を問う

問2 いかに自館刊行物へのアクセス保証するか

A：自館刊行物へのアクセスを自館で保証する
→ がんばりましょう！
visibility の向上はさておいて

B：自館刊行物へのアクセスを他館の公開ライ
ブラリに委ねる
→ 国立国会図書館へ寄贈する
→ ALC 参加館へ寄贈する

問2がA： B：だとしても，「アクセス可能性は保証
されているか」をさらに問う

問3 アクセスの質を高める

A：ものとしての刊行物があれば良い

→ 棚に並んでれば良いじゃん

B：ものとしての刊行物の目録情報があれば良い

→ 問2 B：への処方でまず可能

C：中身(収載論文/記事にまで及んだ)の書
誌情報の検索可能性を保証しなければ，
「アクセス可能性は保証」とは言えない
と，レベルを上げる

→ これからの課題

試み： 前記の *** 個別館 OPAC の中の(雑誌)記事情
報 東近美 OAPC の場合：
東近美開催展カタログ所収論文等記事/
東近美研究紀要/現代の眼/愛知県美研究紀要
/構造/近代画説/西洋美術研究/横浜美研究
紀要/美術フォーラム 21/西美研究紀要 etc.

計画： 東京国立近代美術館機関リポジトリ(試作中)

・全美加盟館のニュース，紀要，年報 所載論文/記
事情報の一元的検索機能

・全美加盟館の展覧会カタログ 所載論文/記事情報
の一元的検索機能

・上記対象の全文データ公開
すなわち 東京国立近代美術館機関リポジトリ
独立行政法人国立美術館機関リポジトリ
〇〇美術館機関リポジトリ
→JAIRO → CiNii

6. 自館刊行物を自館所蔵作品に代えてその Accessibility を問う

メインストリーム
ここまで語ってきた二次資料論を美術館の 本 論 であ
る所蔵作品情報に敷衍して考えてみる

所蔵作品情報への Accessibility を「市井の一人」と
して問うこと

・あなたが住んでいる市の、区の、町の美術館の所蔵
品情報はどのようにして得られますか？

・その美術館のホームページに所蔵作品情報は公開さ
れていますか？

・所蔵作品情報を掲載してる刊行物、例えば『年報』
はどこに行けば見られますか？

その美術館にライブラリはありますか？
その美術館の近くの公共図書館に『年報』は
ありますか？

・そもそも『所蔵品目録』は刊行されていますか？

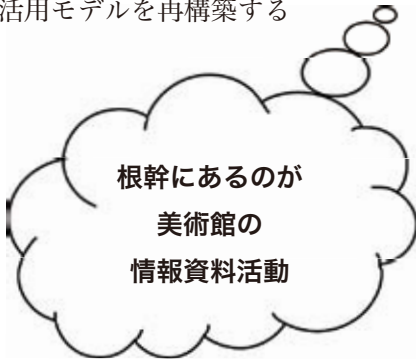
どこに行けば見られますか？
その美術館にライブラリはありますか？
その美術館の近くの公共図書館に『所蔵品目
録』はありますか？

7. 終わりに

自館コンテンツ

- ・所蔵品
- ・自館刊行物
- ・所蔵資料
- ・展覧会等催事コンテンツ
- ・教育普及活動 etc.

これらすべての公開と Accessibility を問い、
その活用モデルを再構築する



1. はじめに

第Ⅳ講で紹介されたBHAなどの書誌・索引を駆使して、あるいは単純に「芋蔓式」でみつけた文献は、実際にはどのように手に入れられるだろうか。現物にあたって確認するのが基本だが、たとえ現物が身近になくても、大学に所属する教員や学生ならば附属図書館を通じて他大学から取り寄せることが可能だ。ところが一旦大学を離れ美術館に就職すると、そうした手段に頼ることはできなくなる。美術館の学芸員は、どうすれば文献を入手できるだろうか。

近年は、学術雑誌の電子化とインターネット公開が大きな進展を見せており、美術分野の文献も増えつつある。フリーでアクセスできる電子ジャーナルは、美術館の学芸員にも活用できる共有資源だ。本講では、ウェブ上で公開されているそれらのリソースを中心に、その探し方や使い方を具体的にみていきたい。

* BHA
<<http://library.getty.edu/bha>>

2. 雑誌

2.1 国立国会図書館の蔵書検索から本文（フルテキスト）へ

探している文献が日本語で書かれている場合は、まず国立国会図書館（NDL）の蔵書検索システム「NDL-OPAC」にあたってみることをおすすめしたい。運よく当該文献の電子版が見つかることもあるし、少なくともこのシステムを操作することで（本講の範疇ではないが）遠隔複写サービスの依頼を簡単に行うことができる。

雑誌論文であれば、NDL-OPAC メイン画面から「雑誌記事索引の検索／申込み」を選択し、あらためて探している文献を検索する。求める文献情報がヒットしたら、その詳細画面を表示させよう。詳細表示では、「他のデータベースへ [よむ！さがす!]」というアイコンが出現するので、それをクリックすると新たに画面が立ち上がる。この画面を「中間窓」というが、そこ

で「ベーシックサービス」内の「本文」という項目に情報が表示されていれば、ウェブ上で本文（フルテキスト）が入手できるということを意味する。「Go」ボタンをクリックすることで、その提供元サイトへと導かれる。

このような、記事索引などの検索結果から、新たに出現する画面（中間窓）を介して、最適なリンク先（ウェブ資源など）へと導く仕組みのことを一般に**リンク・リゾルバー**（リンクを解決する人、の意）という。リンク・リゾルバーは大学図書館等がその利用者のために導入する有料サービスの一種で、たとえ中間窓がウェブ上で公開されていても、リンク先が当該図書館のライセンス契約誌の場合、外部からアクセスすることはできない。第三者にとっても有益なのはリンク先が**オープンアクセス・ジャーナル**（無料で閲覧・ダウンロードできる電子ジャーナル）の場合で、ここに紹介したNDL-OPACから本文へと辿っていく使い方は後者のケースを念頭に置いたものである。

* NDL-OPAC（National Diet Library – Online Public Access Catalogue）
< <http://opac.ndl.go.jp/> >

2.2 「どの雑誌が電子化されているか」を調べる

例えば探している文献が『美學』に収録されているというとき、「『美學』という雑誌は電子化されているか」「電子化されているとすれば何号から何号までか」といったことを調べるアプローチの仕方もある。そのような場合は、グーグルで発行元のサイトを確認するのも一つの方法だが、ここではグーグル以外の方法を紹介しよう。実践女子大学図書館が運営している「日本語学術雑誌情報源ナビJJRNav i（Japanese Journal Resources Navigator）」は、当該雑誌が電子化されているかを調べられるツールである。

JJRNav i では、雑誌タイトルの一部を入力して検索することもできるし、五十音順・アルファベット順で一覧表示する「AtoZ リスト」もある。一覧には『**五浦論叢**』や『**美學**』などの雑誌が挙げられており、それらが電子版で無料公開されていることが分かる。

洋雑誌については、レーゲンスブルク大学図書館が運営する「Electronic Journals Library（EZB）」が同様のサービスを提供しているが、こちらでは有料の電子ジャーナルも網羅されている（無料か有料かの区別はされている）。EZB は運営元のレーゲンスブルク大学サイトのほか、美術史の文献情報総合サイト「arthistoricum.net」上でも利用可能だ。欧米圏では雑誌の電子化が日本よりはるかに進んでおり、19 世紀末の美術雑誌『**パン**』や『**ユーゲント**』はすでにオンラインで全文アクセス可能だ。

* JJRNav i（Japanese Journal Resources Navigator）
<<http://jcross.jissen.ac.jp/atoz/index.html>>

* Electronic Journals Library（EZB）
<<http://rzblx1.uni-regensburg.de/ezeit/>>

* arthistoricum.net
<<http://arthistoricum.net/>>

* arthistoricum.net 内の EZB
<http://www.arthistoricum.net/no_cache/en/recherche/recherche/ezb/>

2.3 「JSTOR」とは

前項で紹介した「電子ジャーナル図書館」（EZB）をみていくと、雑誌名に続いて「via JSTOR」という文言が頻繁に出てくるのに気づく。「JSTOR 経由で利用可能」ということだが、そもそも JSTOR とは一体何だろうか。

JSTOR は、今や欧米圏の美術研究者の間では Google、BHA、KubiKat（ドイツ系の美術図書館連合 OPAC で、論文単位の検索も可能。<http://www.kubikat.org/>）とともに美術研究の基本ツールとみなされる学術雑誌アーカイブのことである。有料だが、『**アート・ブリテン**』、『**パーリントン・マガジン**』、『**メトロポリタン美術館紀要**』など英米圏の主要 165 誌が創刊号から過去 1 ～ 5 年前の号まで全文利用できるスケールの大きいアーカイブである。美術館に対しては大学より有利な価格体系で提供されており、年間契約料はきわめて安価だ。

全文検索機能に対応しており、本文中はもちろん図版キャプションの語句でも検索可能である。ヒットし

た論文のフルテキストは PDF ファイルとして閲覧・ダウンロードできる。国内では東京国立近代美術館アートライブラリ、国立西洋美術館研究資料センター、国立新美術館アートライブラリーなどが JSTOR を契約しているので、3 館の OPAC あるいは美術図書館横断検索（ALC）で「電子ジャーナル」あるいは「electronic resource」と記されている雑誌に出会ったら、是非いずれかの図書館を訪問してみてほしい。

* JSTOR
<<http://www.jstor.org/>>
契約・料金等の詳細については下記を参照のこと：
<<http://www.usaco.co.jp/products/jstor/>>

3. 図書

3.1 和図書のフルテキストを探す

雑誌論文ではなく、単行書を探しているときにはどうすればよいだろうか。今日では、身近な図書館になく、古書店にみつからなくても、運よく電子版の方がみつかることもある。近年、**機関リポジトリ**（大学などがその知的生産物を電子化し保存・公開するために設置するシステム）が普及し、また世界中の図書館が競うように蔵書の電子化を進めているからである。

このようなデジタル資源をサイトごとに検索するのは手間だが、総合的に検索するポータル・サイトが発達しつつある。国立国会図書館が運営する「国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）」もその一つだ。検索画面でカテゴリ「デジタルアーカイブ」のみをチェックして（その他のチェックをはずして）検索すると、フルテキストが公開されている書籍のデータがヒットする。例えば『**稿本日本帝国美術略史**』やフェノロサの『**美術真説**』などの電子版が公開されていることが分かる。

2010 年 8 月に試験公開が開始された「国立国会図書館サーチ（開発版）」は、この PORTA をも含むさらに上位の総合検索が構想されているようだ。ただし現在は機能上の制約があるとのこと。本稼働は 2012 年に予定されている。

3.2 洋図書のフルテキストを探す

欧州では、欧州内の専門機関で公開されている資源

を総合的に検索できるポータル・サイト「europeana」がある。例えば**ジョルジョ・ヴァザーリ『芸術家列伝』**の原書がウェブで全文公開されていることなどはこのサイトで確認できる。

一方、美術史の文献に限定すると、先述のarthistoricum.net が著者別にまとまっていて探しやすい。トップページから「Thematic Portal: History of Art History」、「Resources: Digital Art Literature」とたどっていくと、著者名リストが表示され、**ジョン・ラスキン、ヤーコブ・ブルクハルト、ハインリヒ・ヴェルフリン**ら著名な美術史家の名が散見する。これは、ハイデルベルク大学図書館が所蔵する美術史特別コレクションのなかから電子化された書籍を著者名順に列挙したものである。著者名をクリックするとどの文献が電子化されているかが一目で分かり、最終的にはその提供元サイトへとアクセスすることができる。

＊ 国立国会図書館デジタルアーカイブポータル (PORTA)
<<http://porta.ndl.go.jp/>>

＊ 国立国会図書館サーチ（開発版）
<<http://iss.ndl.go.jp/>>

＊ europeana
<<http://www.europeana.eu/portal/>>

＊ arthistoricum.net 内の美術史文献
<<http://www.arthistoricum.net/en/themenportale/kunstgeschichte/resources-digital-art-literature/>>

4. まとめ ～文献をどうやって入手するか～

4.1 日本語の文献を手に入れたい

まず NDL-OPAC にあたってみる

→ リンク・リゾルバーから本文（フルテキスト）へあるいは
→ 遠隔複写申込み（要利用者登録、登録料は不要。複写・郵送料は有料）

4.2 「どの雑誌がウェブで入手できるか」を知る

和雑誌：JJRNavi
洋雑誌：EZB（Electronic Journals Library）

4.3 フルテキストを手に入れるには

電子ジャーナル：JSTOR（要契約、有料）
和文献：PORTA
洋文献：europeana、arthistoricum.net

参考サイト
「オープンアクセスジャーナルリンク集」（国立国会図書館リサーチ・ナビ）2009 年 5 月 10 日
<http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400309.php>

「無料電子雑誌論文の見つけ方」（国立国会図書館リサーチ・ナビ）2009 年 5 月 10 日
<http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400134.php>

「著者所属機関の機関リポジトリで灰色文献を探す」（国立国会図書館リサーチ・ナビ）2009 年 5 月 10 日
<http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400156.php>

国立西洋美術館研究資料センター「学術情報案内」
<<http://www.nmwa.go.jp/jp/education/resources.html>>
本稿で紹介したもの以外でも、西洋の売立目録のフルテキスト・アーカイブ等、当センターで利用できるリソースを紹介しています。

＊本稿に記したウェブページ URL は全て 2010 年 8 月 24 日現在。

はじめに

本稿では美術館が作品情報をインターネットからアクセス可能とするための考え方、方法を紹介する。また、将来的にさまざまな情報システムに対応しやすいデータ表現形式として「XML 形式」を紹介する。

1. 作品情報

作品A 縦: 21.5 横: 43.5	作品D 高さ: 2.5 直径: 23.5
作品B 縦: 21.5 横: 23.5 高さ: 8.5	作品E 長さ: 24.5
作品C 横: 21.5 高さ: 23.5 奥行き: 23.5	作品F 長径: 21.5 短径: 12.5
	作品G スクリーン: 400x121

図1: 作品情報(大きさ)のバリエーション

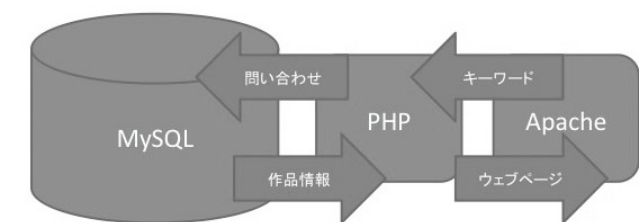
作品情報を構成する項目のうち、「大きさ」を例にして、作品情報の「表現」について考えてみる。一口に作品の「大きさ」といっても、その詳細は図1のようにさまざまである。これらの情報を「リレーショナルデータベース」、「Google によるサイト内検索」、「全文検索」で検索することを考える。

作品	縦	横	高さ	奥行き	長さ	直径	長径	短径	その他
A	21.5	43.5							
B	21.5	23.5	8.5						
C	21.5	23.5		23.5					
D			2.5			23.5			
E					24.5				
F							21.5	12.5	
G									400x121

表1: 「表」形式による作品情報の例

(1) リレーショナルデータベース (表モデル)

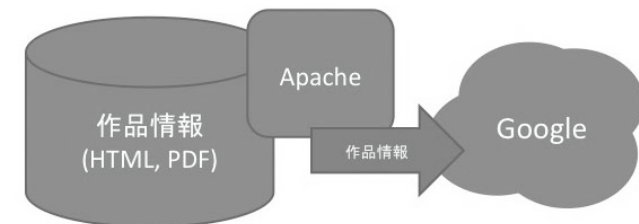
作品情報を表1のような「表」の形で表わすと、MySQL や PostgreSQL といった「リレーショナルデータベース」に格納して検索可能となる (下図)。



多くの作品検索システムは上記のような構成を持つ。多くの開発事例もあり手堅い方法である。ただし、作品情報は「表」として表現されるが、項目の追加や例外的な内容を持つ情報への対応が困難な場合がある。

(2) Google によるサイト内検索

作品情報をウェブサーバー上で HTML ファイルや PDF ファイルとして公開する。



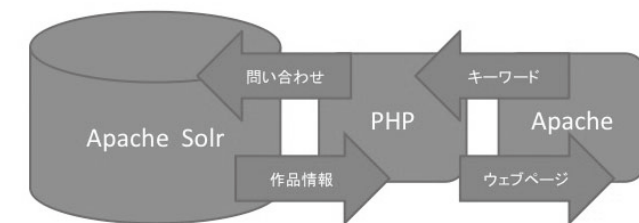
Google などの情報検索サービスが提供する「サイト内検索」:



を利用することで、作品情報の検索が可能となる。

(3) 全文検索

Google が提供しているような「全文検索」を無償提供されているソフトウェアを利用し、構築することが可能である。(前述のリレーショナルデータベースの代わりに、全文検索ソフトウェアである "Apache Solr" を使用する。)



2. XML

テキストとして記述された作品情報に「何」が書かれているか、情報システムは人ほどの文書認識能力を備えていないので、文書の構造や文脈に応じて読み取ることはできない。そこで、情報システムにも「読みやすい」テキストを作成し、ヒトにもシステムにも可読な情報表現を考えてみる。ポイントは情報 (テキスト) のどこからどこまでがどのような項目であるか、はつきりと記述するということである。すなわち、

・データの項目の範囲
(テキスト中のどこから、どこまでか)

・データの項目の名前

の2つをテキスト中に明示するということである。項目をはっきりさせたい場合、「履歴書」のように、項目と項目の間に罫線 (項目の範囲の目印) を引き、それぞれの欄に項目名を付して様式化しているが、作品情報の情報表現においては罫線のような視覚的情報ではなく、情報システムが取り扱いやすいテキスト情報で「項目の明確化」を実現する必要がある。



XML(Extensible Markup Language) では

項目の範囲と名称を

< 項目名 > 内容 </ 項目名 >

と記述する。

< 項目名 > . . . 項目の始まり

</ 項目名 > . . . 項目の終り

を示す。

例:

< 住所 > 106-8558 東京都港区六本木 7-22-2 </ 住所 >

さらに「住所」のように1つの項目が複数の要素 (小項目) から成っている場合には、

住所 = 郵便番号 + 都道府県名
+ 市区町村名 + 番地 + 建物名

等というように1つの項目の内容をさらに小項目に分割して、個々の小項目についても範囲や名前をはっきりさせることも重要である。

前述の例の場合:

< 住所 >
< 郵便番号 > 106-8558 </ 郵便番号 >
< 都道府県 > 東京都 </ 都道府県 >
< 市区 > 港区 </ 市区 >
< 町村 > 六本木 </ 町村 >
< 番地等 > 7-22-2 </ 番地等 >
</ 住所 >

"Markup Language" とは、上記の例のようにテキスト中に語句(上記の例の<大きさ>など)を追加して、テキストの自動処理を可能にする方法であり、XML ではそれら語句をテキストの目的や用途に応じて自由に付けることができる。なお、"Extensible" でない "Markup Language" の例が "HTML(Hypertext Markup Language)" である。HTML ではウェブブラウザでの表示のために "<h1>" や "" などの "語句" をテキストに挿入していくが、これらの語句は規格化され、そのような意味で拡張可能(Extensible)ではない。

この XML 形式で作品情報(もちろん、図書情報でも展覧会情報でも)を記述すると、情報システムで利用しやすく、かつ、ヒトにとってもテキストとして可読であるので、汎用性や可搬性、長期保存性を備えた情報表現の形式として、非常に有効である。

XML 形式で情報を記述する際に用いる<作品>や<大きさ>などの語句を「XML 要素」と呼ぶ。XML 要素の選び方、決め方は Extensible ゆえに自由である。

作品情報を交換したり、一箇所に集めて横断的に検索する際などには、記述する際に使用する XML 要素の「語彙」を一つに定め、その「語彙」を用いて作品情報を記述した方がよい場合がある。そのような「語彙」として利用できるものには

・ CIDOC CRM
(<http://www.cidoc-crm.org/index.html>)

・ Dublin Core

・ RSS

などがある。

おわりに

情報システムの「寿命」は OS をはじめとするソフトウェアのサポートの期間などで決まるが、電子化された作品情報は永続的である。柔軟性、汎用性、可搬性に優れたデータ表現方法はデータベース製品の知識以上に美術館職員に求められる情報スキルといえる。

招待講座Ⅰ 「木村定三コレクションの寄贈受入れ」

2010.9.10（金） 14:00—15:00 於、愛知芸術文化センター

村田 眞宏（愛知県美術館）

古田 浩俊（愛知県美術館）

木村定三（1913—2003）

名古屋市内に多くの土地家屋を有し肥料米穀仲買を生業とする素封家の三男として生まれ、東京帝国大学法学部を卒業後、名古屋に戻る。父親も書画骨董の趣味があり、定三氏も学生時代から美術品の収集を始める。25歳の時に、当時まだ無名の画家だった熊谷守一の日本画展を見て作品を購入し、その後も守一が没するまで支援を続けた。晩年には須田剋太の後援会長を務めた。

木村氏が多くのコレクターと違うのは、コレクションすることが目的ではなく、自分の研究のために必要だから作品を集めたという点である。他人に見てもらうためにコレクションしたわけではないので、作品の貸出しに関してはきわめて厳格で、木村氏の出した質問に答えられなければ貸してもらえなかったという話は有名である。

木村氏のコレクションが愛知県美術館に寄贈されるまで、木村氏が所蔵していることが知られていたのは3000点を越える膨大なコレクションのほんの一部に過ぎなかった。

寄贈の経緯

2001（平成13）年度
定三氏より寄託作品11件の寄贈

2002（平成14）年度
定三氏より333件の寄贈

1月 定三氏逝去

2003（平成15）年度
美保子夫人より2,920件の寄贈

2004（平成16）年度
美保子夫人より20件の寄贈

招待講座Ⅱ 「愛知県美術館の作品目録の作成—木村定三コレクションを中心に」

2010.9.10（金） 15:10—16:10 於、愛知芸術文化センター

鯨井 秀伸（愛知県美術館）

作品目録作成の経緯と展開および試みとしてのカタログギングの実際的概要

1. 基本調査に基づく受入台帳の作成や基礎調査と並行した撮影作業

採寸と最低限の文字情報記録（落款印章や箱書など）

印刷等に使用する写真撮影の必要性

全作品のカメラマンによる撮影

5. 作品（資料）の公開の必要性と時代的要請

所蔵品の管理として／資料の情報公開・普及として／出版物としての目録／デジタル化の要請とそれへの対応

現代的傾向と標準化の課題／情報の参照的あるいは概念的扱いとそれへの対応

さまざまな課題と試み

2. 美術史的・学術的な調査研究

美術館学芸員による調査

外部の専門家による調査と研究

※1 資料複数人調査の原則

3. 作品カードとカード・フォルダーの整備

上記調査・撮影・調査研究に基づく所蔵作品カード／写真フォルダーの整備、状態調査／その他資料の整備。

4. カタログギング上の課題と検討事項

広範な資料分野の別による記述用語の相違と実際的な記述の実情

用語統制の課題／時代設定の課題等々



全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画 セミナーⅡ 予稿集

美術情報・資料の活用 ― 展覧会カタログから Web まで

発行 / 編集 全国美術館会議 情報・資料研究部会
(全国美術館会議 事務局) 〒110-0007
東京都台東区上野公園 7-7 国立西洋美術館内
TEL : 03-3828-0290 FAX : 03-3828-0295
URL : <http://www.zenbi.jp>

発行日 2010 年 9 月 9 日

印 刷 株式会社 プリンテック